

《研究ノート》

西独大学の「社会学研究所」巡り

—その2—

鈴木 幸 壽

ブラウンシュヴァイク工業大学

Technische Universität

Braunschweig

政治学ゼミナール

Seminar für Politikwissenschaft

1929年から30年、当時のブラウンシュヴァイク工科大学文化学科の教授としてテオードール・ガイガーが招聘されたとき、はじめてブラウンシュヴァイク工業大学に社会学がおかれた。ガイガーは、1933年初頭に亡命するまでこの工科大学で、国民学校および中学校の教員養成（大学並みの教育）のため働いたのである。その後間もなく教員養成は—社会学を続けることなく—工科大学から切り離され、そして1945年以降は、1978年ブラウンシュヴァイク工業大学に教育学専門分野として統合されるまでは、教育大学に引き継がれていた。教育大学にはすでに1946年以降、小・中校教員の基礎科学教育のなかの政治学および哲学と並んで、社会学が存在していたのである。ブラウンシュヴァイク工科大学は、1968年に新しい哲学学部と社会科学学部を有する工業大学に衣替えをした。この学部には、1969年から社会学は、かつての政治学の講座—本来はギムナジウム教員の社会科のための教育であったが—に研究協力者と講義担当者によって代表された。

1982年以来、同学部内の政治学および社会学

ゼミナール—現在は工業大学の哲学と社会科学の専門分野であるが—は、政治学としては二つの教員スタッフからできている。それは、教授クラウス・ロンペ博士のポジションが一つ、それに加えて政治社会学がVenia Legendi（許可講座）をもっている。これにさらに時に応じて政治学に二つポジションがある。また、教授ウルリケ・フォーゲル博士が社会学にいる。ここには六名の学術評議員と研究助手があり、そのなかの一人が学術評議員のペーター・ロウルケ博士、そして時に社会学に関係するウルリッヒ・ハイダー博士が二人目の学術評議員である。

数年前までは、ギムナジウムの教員養成が主であったが、現在はマギスター（学位名で教師一般に適用されるもの）課程が主となり主・副専攻に政治学と社会学があると同時に、学位取得もできる。社会学のマギスター基礎課程の内容は、社会学入門、社会学理論入門、経験的社会調査方法入門、ミクロおよびマクロ社会学の一部の入門がある。マギスターの専門課程の社会学には、社会学史と社会学的理論的研究と並んで、特殊社会学、とくに社会化の全体社会の構造と過程、そして重点的に政治社会学、教育および社会化—このなかから主専攻学生が選ばれるが—が内容としてある。

ロンペ教授の指導による、南東ニーダーザックセン地方の失業中の社会扶助者の生活実態調査研究プロジェクトがあり、それは社会的弱者に対する国庫補助の引上げとインタビューを行

い、その結論は、近く出されることになっている。(ハイダー博士の)政治計画の社会理論的基礎研究も同様に結論が出されることになっている。学生の勉学に関する研究プロジェクトは、学生の生い立ちを背景としておこなわれ、フォーゲル教授によってその成果が1986年にまとめられた。学卒者の子弟か否か、学卒者の母をもつか父をもつかという研究の成果が生い立ちを前提におこなわれた点が重要であった。個別の分析を手がかりにして、とくにインテンシブなインタビューによる評価に基づいて個々のケースと典型的な共通点が明らかにされた。

最新の書籍出版：—論文も含めて—

クラウス・ロンペ：『社会国家と危機』ペーター・ランク社、ベルン、1987年。ウルリケ・フォーゲル：『学生の勉学戦略—生い立ちの分析—』キャンパス社、フランクフルト、1986。

執筆者 ウルリケ・フォーゲル

(Ulrike Vogel)

ハンブルク大学

Universität Hamburg

社会学研究所

Institut für Soziologie

ハンブルク大学における社会学は、1919年大学が創設されてからずっと存在した。そしてさらにフリートリッヒ・フォン・ゴットル・オットリーエンフェルト、クルト・ジンガー、エドゥアルト・ハイマン、ジークフリート・ランズフット、ヴァルデマール・ツィンマーマンのような評判の高かった経済学者によって研究がおこなわれてきた。1926年に、これら学者に促がされ、法学部および国家科学部の枠内で、独自に社会学講座が設置された。これはドイツの大学では、ライプチッヒ大学に次いで、第二番目の社会学講座であった。1921年以来、ゲッチンゲンで社会学と歴史の講義を担当していたアン

ドレアス・ヴァルターが社会学講座を担当した。ヴァルターは、研究と教育面で、独立の、経験的に整備された専門の社会学—独自の職業分野をもった専門の社会学—という考え方に立つ代表者であった。つまりかれは専門的 sociology の草分けだったのである。次第に実証主義的、機能主義的組織ができあがっていくのと並んで、ヴァルターは、民族社会学さらには都市社会学にも身を入れた。中途半端さ、また同僚間の争いが、「社会学のゼミナール」を望ましい方向に作りあげることの妨げになった。ドイツにおけるアメリカ社会学の紹介(1927)、M. ウェーバー(1926)、ハンス・フライヤー(1931)に関する著作を出したヴァルターの業績*は大いに読まれ議論的となった。1929年かれはDGS(ドイツ社会学会)の理事になった。1932年にはゼミナール部長になった。1934年この社会学講座は哲学部に移され、(一学期間)すぐ学部長になっている。ヴァルターは、社会学の置き換えて、充分利用されたものであるが、学位授与権を戦い取った。すなわち、1945年までに30の学士論文、加えて2つの大学教授資格論文がそれである。かれは「ドイツ社会学」の草分けに入る学者であり、1933~34年のDGSの自己統制に大に関係した人である。1934~35年かれは労働供給プログラムを作り、公的援助を受けて、「批判的な」ものとして分類された8つの都市部で郊外の社会構造を研究した。これはシカゴ学派の方法の応用であるが、周辺部にあるものを再編するのではなく、将来の都市改造

*訳注 Max Weber als Soziologe, in *Jahrbuch für Soziologie II*, 1926.

Soziologie und Sozialwissenschaften in Amerika 1927.

Soziale Distanz, in ; *Kölner Vjschr. f. Soz.*, N. F. 9, 1930~31.

のための政治的・倫理的に嫌われるものを探ろうとしたものである。社会学の研究教育活動は、1944年まで前と変わることなくおこなわれたが、1933年以前の時代に比べると、本質的により多くの教授内容が提供されていた。平均して学生数は20名に留まった。(助手1名)1940年にヴァルターは、(一年間)「学部の政策専門委員会」の委員長、そして1944年に退官した。時に講座が犠牲になったのではないかとの問が発せられたばあい、国家および党の援助で、学部の抵抗に対して社会学は維持されてきたのが特徴だといえる。

戦後専門分野の不毛の時代が始まった。経済学者ハンス・リッチェルは、1946年以来社会学の講義を2時間担当したが、この講座は多くの関心ある者がいたにもかかわらず、その当座教室が一杯にはならなかった。1951年、ジークフリート・ランズフートが大学に戻って「政治学」の正教授にはじめてなった。1953年になってやっとヘルムート・シェルスキーが社会学の正教授に任命されたが、それは1948年シェルスキーが哲学部の教授就任が保留されたあとであった。「社会学ゼミナール」は、政治学研究所、新設の社会学研究所、経済史および社会史(1957年以降、カール・ヤントケ)研究所と共に、法学および国家科学—1954年からは経済学部と社会科学学部内におかれたが—のなかの社会諸科学のゼミナールに統一された。当時、こうした社会科学のゼミナールはすべて、独自の部屋をもち、数人の助手と秘書が配属されていた。ユニークなことは、経済学・社会科学学部と哲学部という二つの学部に社会学の講座が開かれていることであった。学士号取得は一学士号に限られてはいたが—両学部で可能だった。それから50年代には、シェルスキーの援助の下ですべての業績が生まれた。それらは、青年の失業、家族の機能変化、『疑いの時代』、中間階

級の平準化について、シェルスキーをして「現実性への追求者」たらしめたものである。ハインツ・クルートとルドルフ・タルトラーはシェルスキーの協力者であった。ゼミナールでも私的の場でも、学際的な会話を交えることが、シェルスキー式のやり方であった。1960年にシェルスキーがミュンスターへ移ってからは、講座はハインツ・クルートが引き継いだ。この講座は1977年クルートが死去するまでであった。ますますこの研究所は、小規模ながら大きな業績を残した。クルートの助手群には、数年間、グレゴール・ジーファーとホルスト・ユルゲン・ハレが加わっていた。古い講義題目表を手にとってみると、社会学は、広さの点でも深さの点でも、理論面でも経験論でも、一般的でも特殊な方面でも提供したものが多きことを知ることができる。

1963年、第二社会学講座—再び2学部内ではあるが—が設置された。シェルスキーの助手としてミュンスターへ行っていたルドルフ・タルトラーが、その職務を継いだ。1964年かれの急死は、かれの仕事をもはや続行しえなくした。1966年ヤン・ペーター・コプが教授となり、この教授職は20年の長きにわたって、コプが突然の苦痛に満ちた1986年の死に至るまで保持された。クルートとコプの両教授は、あまり業績はなかった。

60年代終り頃、社会科学のゼミナールの状況は益々変貌をとげていたが、かつての評価に値する構造は学生数の増加とともに色褪せた。学問の組織からいえば、ゼミナールのこの変貌は(1969~70)、ほとんど今日の研究を規定するようようなものであった。学部の解体は社会学を「哲学と社会科学」という専門分野に入れてしまったのである。その結果、法学と経済学の付随的専門科目をもつ社会学者のための学士号取得課程が作られた。それには心理学と経済史、

心理学あるいは経済史、それになお、学士試験が経済史と社会史の専門課程を伴うものでもあった。学士号授与の教育課程には副専攻科目として選択科目が二つある。学位号は、政治学博士と哲学博士をとることができる。加えて、社会科教員の教育も加わっている。1978年、社会科学のゼミナールは、三つの研究所に分かれ—これらの下に社会学の研究所がない—研究所は七つの重点部門に分かれている。一般社会学、社会化、逸脱行動、都市研究、経済と経営、コミュニケーションとマスメディア、方法論とデータ処理である。各重点部門はそれぞれ独自の計画をもっており、どの部門にも研究者は入ることができるがそれらは研究者の自由に委せられている。

70年代における研究所の拡大後—教師、学生に関していえば—はっきりと後退がみられる。

教授陣では地位停滞が目される。ほとんど助手なし、補助者なしといった15人の教授と講師がいる。依託講師を含めて70の講座が一学期ごとに提供される。学生側では教師志望学生が大いに減少しているのが目立つ。教師志望学生数の約10%だけが70年代あたりから研究所で学んでおり、絶対数では約300人である。社会学という専門分野でいえば、学士、修士および博士修了者は、ほぼ1,100名を算えている。

執筆者 ライナー・ヴァスナー
(Reiner Waßner)

SOZIOLOGIE

Mitteilungsblatt der Deutschen Gesellschaft für Soziologie 1.87 (S.38-44) より転載翻訳

(すずき ゆきとし、本学科主任教授)